

問いと年表を活用して スキーマを形成する

——トルコ人の西アジア進出を題材に

田巻 慶

新

学習指導要領が開始され、コンピテンシーベースの授業への転換が求められている。歴史総合では多くのすぐれた先生方が高い問題意識のもと、歴史を自分事にするための実践を積み重ねている。選択履修の世界史探究は学習者がかなり限られてくる。歴史総合を学んだうえで世界の歴史を探究したいと思って履修してくれた生徒に対して、歴史総合よりもさらに発展的な資質能力を身につけ、世界史を学ぶ意味を実感してもらうことが授業者として喫緊の課題である。そして、世界史探究のカリキュラムに込めたメッセージで未来の履修者を(歴史総合の時間などを通じて)ひきつけることができるように、世界史探究をよい意味で歴史総合と差別化し、学び甲斐のある科目としてカリキュラムや授業構成を検討する必要があると考える。本稿は受験指導の現実もふまえながら、世界史探究だからこそ学べること・考察できるテーマを検討した授業実践の記録である。

スキーマの形成と年表学習

高校2年生以降で履修が始まる世界史探究は受験指導を念頭においた場合、1年間で通史すべてを学習することは不可能であろう。高校3年生に進級し、受験のプレッシャーがせまるなかで探究的な学びに力点をおきすぎると不安をいだく生徒が一定数いる。そのような受験生を指導する際に学習科学や認知心理学にもとづいた学習方略について話をする、生徒は関心をもつ。進路に関して日々葛藤する生徒たちにとって、科学的に裏付けられた学習観をはぐくむことを目的としてHR

や授業内で様々な話をする機会があるが、そのなかでも世界史学習に寄せてスキーマという概念を紹介した。米国学術研究推進会議編著(2002)によれば、特定の領域の専門知識や技能にひいている熟達者は、課題内容に関して多量の知識を獲得しており、それらの知識は課題に対する深い理解を反映する様式で体制化されているという。ではどのようにして、知識が体制化されているのかといえば、その領域についての思考をガイドする概念、すなわち「核心的で重要な考え」を軸に体制化されている。今回の授業実践のもとになった下記の入試問題を例に具体的に考えてみたい。

10～11世紀は、西アジアにおけるイスラム世界の歴史の展開の中で、1つの大きな転換期であったと考えられる。このように考えられる理由を、政治・社会・宗教の3つの側面から、300字以内で具体的に説明せよ。
(京都大学・1993)

この問題の軸となる「核心的で重要な考え」は諸地域の再編の要因となるイスラームの伝播とトルコ人の西アジア進出である。もう少し抽象化すると宗教の広がりや民族移動である。出題されている時代と政治・社会・宗教の3つの側面からスルタン制の成立、イクター制の導入、スーフイズムの拡大を想起し、各論の核として整理できると解答を作成できるが、この「核心的で重要な考え」から政治・社会・宗教それぞれの転換点を有機的に結びつけて理解することができる。また、ほかの地域でもおきうる現象としてとらえることができれば、できごとをぶつ切りに理解して覚えることで生じる負荷を緩和できると考える。たとえば「あ

る民族がほかの地域に移動した際に、その地域に広まる宗教に適應することで地域に定住する足がかりを得る」ことや、「宗教ははじめは知識人に権威づけられていたとしても、広く布教するために民衆に理解しやすく、信仰しやすいように変容していく」ことなどはゲルマン民族やバクティ運動などにもあてはまる。ただし、実際に生徒に授業する際には学問研究においては異なる事象を単純化して比較する姿勢について慎重になるべきであると伝えている。

授業は上述の論述問題を解いたあと、周辺知識を復習するかたちで実施した。対象は夏期講習に参加した高校3年生19名である。今回はトルコ人の西アジア進出に焦点を当てて授業をおこなった。この問題を選定した理由は、同時代のイスラーム世界全体を俯瞰することができ、変化を読み取りやすいことがあげられる。また、スキーマの形成をうながす活動として年表学習を取り入れた。諸地域・世界別の年表は重要な事項が地域別に時系列で整理されているため、「核心的で重要な考え」を考察する土台の役割になると考えた。とくに国家の分裂・統合などの変化をなぞっていきながら因果関係を説明できるように訓練することで歴史の流れが学習者のなかに体制化されていくと考える。

MQ. なぜ、11世紀にトルコ人王朝が増えたのか？

まず、導入として10世紀から11世紀に読み取れる大きな変化を年表からさがしていく。実際の授業ではさらにハードルを下げて年表に登場する王朝を民族ごとに色分けする作業をおこなった。そうするとトルコ人の王朝が11世紀にアナトリアまで勢力を拡大していることに気づく。MQの考察をたすけるためにSQ1～6を考える。

SQ1. 地図上でみた時にトルコ人王朝はどのような順番で成立してきたか？

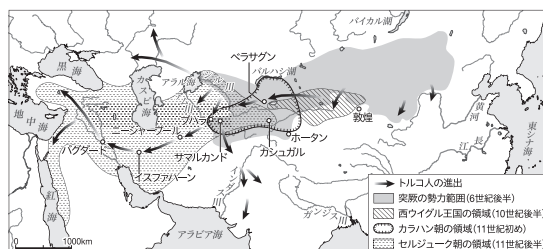


図1 トルコ人の西進とトルコ系諸国の領域(『詳説世界史(世探704)』、p.107)

年表上でも成立した王朝を順番に追っていくと、徐々に西進している動きをとらえることができる。図1を示して、トルコ人がトルキスタンに進出した背景を復習する。

SQ2. なぜ遊牧トルコ人はトルキスタンに定住したのか？

天山山脈の北側はモンゴル高原と比べて牧地が狭くなっており、必要な牧民の数が減少するかわりに、すぐそばのオアシス都市や農村へ人口が流入していったことを確認する。

SQ3. 中央アジアのイスラーム化はどのように展開したのか？

地図を読み取りながら、サーマーン朝がアッバース朝から自立し、北方のトルコ人遊牧地帯に向けて聖戦をしかけ、草原の遊牧トルコ人を奴隷として購入し、西アジア世界に輩出して収入源にもしていたことを確認した。

SQ4. なぜ、セルジューク朝は西アジアの政治的覇権を握ることができたのか？

教科書ではスルタンの称号を得たことが必ず紹介されるが、大塚(2022)の解説を引用し、セルジューク朝の歴史的意義がそれだけではない点を気づかせ、歴史をとらえる枠組みについて考えさせる。大塚(2022)はセルジューク朝が中央ユーラシアからアナトリア半島まで領域を広げ、多民族政権の支配者となり、後継地方諸政権に行政制度が

引き継がれたことを重要視し、セルジューク朝の歴史は、トルコ史ではなく、ユーラシア史におけるトルコ系遊牧諸王朝史の文脈で考える必要があると述べている。その後ユーラシア世界を支配したモンゴル帝国に先んじて農耕民・商業民を統治下に加えた歴史的経験を蓄積したとことを考えると重要な指摘である。そして、政治的覇権を握るうえで重要となる行政システムとしてイクター制の内容理解につとめた。ミスカワイフ『諸民族の経験』（10世紀末～11世紀初め）（歴史学研究会編『世界史史料2』（岩波書店、2009年）所収、p.174～175）を読み、史料文中のブワイフ朝君主がトルコ軍人に対してイクターを授与したという記述を確認し、ブワイフ朝の軍隊を構成したトルコ軍人の多くは、奴隷身分の騎馬兵であったという説明を加えた。イスラームにおける奴隷への考え方（教育をほどこし、奴隷身分から解放することが奨励されたことなど）を紹介し、トルコ軍人が台頭する背景を説明した。ブワイフ朝から始まったイクター制を継承し、さらに名宰相ニザーム＝アルムルクが、地方の有力アミールに領域内の財政権をも与え、その配下の軍人にイクターを支給できるようにしたこと、イクター制は西アジアの諸王朝に継承され、イラン・イラク・シリア・エジプトの広い範囲で施行され、軍人の社会全般にわたる支配を強化する機能を果たしたことを補足した。

SQ5. 11世紀に生じたイスラームの転換は何か？

ガザーリーの『宗教諸学の再興』（図2）の構成

図2 ガザーリー『宗教諸学の再興』

- 1部 信仰行為(‘ibādāt)
……礼拝、断食、巡礼などの五行
- 2部 慣習[的行為](‘ādāt)
……食事、婚姻生活、生計の立て方などの日常生活
- 3部 [人々を]危険(muḥlikāt)[に導く悪行]
……心の悪しき側面をいかに克服していくか
- 4部 [人々を]成功(munjiyāt)[に導く善行]
……心を浄化し、神に近づいていく方法

を紹介し、法学とスーフィズムがバランスよく構成されていることに気づかせ、理屈ではなく感覚に訴える教えは、アラブ人以外にイスラームが広がっていくうえでも、大きな導因となったことを説明した。当初は保守的なスンナ派のウラマーたちに非難されていたが、11世紀末のセルジューク朝で高名なウラマーであったガザーリーによって両者の接合がはかられた。彼は、イスラームの信仰には内面的な信仰と外面的な規範がともに欠かすことのできないものであるとし、スーフィズムを宗教諸学の一分野として理論的に位置づけた。

SQ6. セルジューク朝など11世紀以降に台頭した地方政権側はこのような宗教的な変化をどのように受け止めたか？

セルジューク朝政権はマドラサ創設と並行してハーンカーとよばれるスーフィーたちの修行場の建設に力をそそいだというエピソードを紹介し、セルジューク朝をはじめとする地方政権の支配者たちにとって、スーフィーの活動を積極的に支援することにどのような意義があるか考えてもらった。セルジューク朝をはじめとする地方政権の支配者たちは武力で支配権を手にいれた軍人であり、カリフのような宗教的な権威を有してはいなかった。そのため、彼らはみずからの支配の宗教的な正統性をムスリム臣民に示す必要があったが、そこで目をつけたのがウラマーやスーフィーといった宗教知識人たちだったのである。支配者たちはウラマー・スーフィーを支援することで、自分たちが敬虔なムスリム君主であることを印象づけると同時に、支援を通じて彼らを体制側に引きつけることで、宗教勢力の統制もはかったのである。そして、こうした支配と表裏一体の関係にある支援は、その後のムスリム政権の宗教政策にも踏襲されていくことになる。

地球世界の課題を考える

世界史探究は最後の大項目で歴史的経緯をふまえた地球世界の課題の探究という項目を設置している。通史で学んできたことをもとに、持続可能な社会の実現を視野に入れて、主題を設定し探究する活動を学習の総まとめとして位置づけている。各単元の学習を受験のための知識にとどめず、最後の探究活動につなげることができるように、一連の学習の最後に生徒につきのように問いかけた。

**EQ. ある民族が台頭するとはどういう状態か？
22世紀に台頭する民族はあるだろうか？**

考える「足場がけ」として、22世紀の国別の人口予測について書かれた記事を配布した。一部の生徒は人口増加を民族の台頭ととらえ、インドとアフリカ諸国が台頭してくると答えた。とくに経済的に影響力を強めると考える生徒が多かった。生徒のなかにはこの「台頭」という言葉のなかにほかの勢力を抑圧するような支配のニュアンスを読み取る者もいる。たんに人口の増減で国力が左右されたり、どこかの民族や国家が同時代の世界の主導権をもったりするという考えを乗り越えるために、峯陽一『2100年の世界地図——アフラシアの時代』（岩波書店、2019年）、p.186の一節を読み、アフラシアという概念を紹介し、著者がなぜその概念を提唱したのか考えてもらった。

アジアの内部には、覇権的な振る舞いを周辺諸国から懸念されている大国がいくつかある。名指しするならば、中国やインドがそうであり、もちろん日本もそうである。アフリカでも、ナイジェリアやエジプト、南アフリカといった国々は、経済力を含む国力の強さによって周辺諸国から警戒されている。

アフリカとアジアの内部において、「かつての西洋人のように」傲慢に振る舞ってはならないという原則を確認するべきではないだろうか。覇権を求めず、寄生せず、自由を奪わないことが、アフラシアの存在根拠である。古くさくなつたかのよ

うに見える植民地主義批判のロジックにこだわることの未来に向けた意義は、そこにある。

上記の資料を読んだあと、つぎのような感想を書いた生徒が出てきた。「社会のデジタル化やIT化が進む中で、機械を製作したり工場を建設するのに好都合な、乾燥した気候、土地、人口、資源を持つアフリカ大陸とその民族が急成長するだろう。その過程でアフリカの言語や文化、生活が統一されていき、一部の部族の暮らしや歴史が淘汰される危機に陥ったり、アフリカ諸国の経済的発展に伴って大規模な人種差別が起こる可能性があるので、今から国や地域を横断したつながりを持つことが重要だろう。」歴史から学んだことを未来への考察につなげることができている。

おわりに

新課程に移行して、史料読解ベースの授業が増えた。史料読解活動が生徒の主体的な学びを支えているという実感はある。しかし、細かい一次史料ばかりが続くとミクロな視点のみで広範囲の諸地域の歴史の全体像をつかみきれない。そこで今回は年表で時空間を俯瞰する活動を導入し、スキーマの形成を学習活動の目的にすえた。生徒は個々の歴史的事実同士の関連性を年表で確認することができてよかったという感想をもってくれた。しかし、年表を読み取るだけではたんなる作業で終わってしまうため、本質的な問い(EQ)を設定し、歴史総合を学んだ時よりも大きいスケールの地球世界の課題を考えるパートを設けることで、学ぶ意義を実感できる学習をめざしたい。

主要参考文献

大塚修「セルジューク朝——トルコ系遊牧王朝の歴史的意義は何か」(吉澤誠一郎監修『論点・東洋史学』(2022年、ミネルヴァ書房)所収)、p.94～95。

米国学術研究推進会議編著(森敏昭・秋田喜代美監訳)『授業を変える——認知心理学のさらなる挑戦』(北大路書房、2002年)。

(たまき・けい／芝浦工業大学柏中学高等学校教諭)